

いと思います。
幹部として、射手として、これからの部活動を日々充実したものにしていきたいと思うところです。
今後とも宜しく御願います。

第六十四代 管理
関東学連幹事長
加藤真史

この度、國學院大學射撃部管理に推挙されました加藤真史です(カトウマサシと読みます)管理の仕事の内容としては、通例AR弾の補充と標的の確保という事になりますが、今回はその二つに加えてツールBOXの備品の拡充、及びその周辺の射撃環境の向上に力を入れて行きたいと思えます。射撃環境におきましては、射撃場の完成にともない格段に改善されたわけですが、備品面以外での環境の向上に努めて行きたいと思えます。
つきましては、御指導のほどよろしくお願い致します。

ARマスター
二年 相場紀子

この度、エアーマスターに任命されました。
射撃を始めてもうすぐ二年がたちます。ようやく自分の射撃というものがわかりはじめ、点数も上がって、安定してきました。
現在、エアーマスターのレギュラー成績は二

部の上位校と争えるほどの実力を持っています。他の選手達も着実に自己ベストを更新しています。
エアーマスターは、たまプラーザに射場を持つていてるので充実した練習ができます。その努力が点数に反映されているときは確かです。しかし、現在のレギュラーはほぼ固定しているため、レギュラーを決めるのが困難なような、全員のレベルが高くなるのが目標です。
一年生の頃から先輩方に御指導して

いただいたことを引き継ぎ、個人の長所を生かし、短所を補っていきたくです。指導の点で行き届かない所があると思えますが選手全員が一体となって頑張っていきたいです。

『友弾』 によせて

その2 O B 編

『友弾』創刊号、拝受しました。ありがとうございました。卒業後、一、二度会合に出席したことがありますが、それ以来こちらからはなんの連絡もしていないのに覚えていて下さり嬉しく思います。恐縮に思うとともに、これまで何一つお力添えをしておらず申し訳なかったと反省もしています。

射撃部時代を懐かしく思い出しておられます。私が入部したときは四年生の部員はおらず、主将の味村さん、このたび会長になられた安達さんなどが中心のこじんまりとした部でしたが、和気藹々としていました。汗と土の匂い

の染み込んだ軍服を着ての練習、射場整備を終えた後上級生がおこつてくれた一個のアンパン、射場の近くに住んでおられ窓から手を振ってくれた女優の宮城まり子さんの笑顔、銃の修理に通った銀座の銃砲店、試合前に遅くまでやらされたエアライフルの弾の選別やスモールポア用の弾頭磨き等々懐かしい思い出が次々と蘇ってきます。これも『友弾』を送って下さったからで、深く感謝します。

松木さんの文章に「射撃場も新築され」とありましたが、どんなふうになっているのでしょうか。機会があったら一度見学に参りたいと思います。
現役部員皆様のご活躍を祈り、期待していますことをお伝え下さい。
敬具

以上は昨年一月十七日、六十七期の小山勝樹先輩からいただいたお手紙です。小山先輩のご了解をえて原文のまま掲載させていただきました。
編集室

我が青春のゴルゴ13

今年の二月思いがけない一本の電話が鳴った。
それは、OB連合の編集室からのものであった。
なんでも、第二回目の『友弾』に思いついた話を投稿してもらえないかとのことだった。
私は、余りの懐かしさに心踊るのを禁じ得ず、一つ返事をしてしまった。
もう一つお引き受けした理由として、

二月二十日、阿知須駅前を単車で走行中に車を避けきれず転倒し、全治一か月の怪我をしていて自宅療養中の矢先であったのだ。だから、寝たまま編集室の方とお話をしていた訳で、金縛りの様にお引き受けしたのだった。
前置きはともかく本題の思い出話に入るが、構えて昔を振り返れば、それは、ただひたすら懐かしく熱いものがこみあげてくる。
がしかし、反面二十五年以上の歳月が愚鈍な私の記憶をさらに曖昧にしている、個々の記憶は非常に微かなものとなってきているのである。
ただ、私の脳裏に浮かんでくるもの、それは仲間の顔である。
生真面目なSB副将の上保、豪快な主将の渋谷、紅一点の白銀、切り込み隊長統制の武田、笑顔が似合う主務の中村、心のおけるAR副将の久光、向こう気の強い本田、ユーモラスな宮増、そして私、いろんな個性のかたまりのような九人組であった。
この外にも、すったもんだで退部していった連中(ただし、南小谷合宿までの者)を数え合わせると13人であり、私は最近、あの頃を「青春のゴルゴ13時代」と名付けて悦に入っている。
実際に地域の住民たちでゴルゴ13という団体をつくってボランティア活動をしている。
さて、話が変わるが私が射撃部に入つたのは主に健康のため、それまで運動といったら何もしていなかったのこのままではいけないイタメになると、かりたてられるように入部したのである。しかし、同輩連中は中学、高校でクラブ活動を体験していて相当タフであった。

そんな中時折トレーニングのため東京タワーまで走っていくことがあったが、大変きつく、重量のある中村君と尻(けつ)の方をついて走った。(俊太郎すまん)

東京タワーといえば度胸試しということで大勢の観光客の中で、國大校歌を歌った事を覚えてる。

日本中から観光で集まった人達がどきもを抜かれた顔を見るのは希有な体験であり、恥ずかしいながらも、やれば何でもできるんだなという男意気すら感じていた。

この時の教えは我々に大きな影響を与えていて、以後幹部になり精神修養が射撃競技の優秀の決め手とすら感じ、この観点を念頭に合宿でいるんな企画を偶発的に展開していったのである。

その一つに「碁盤の上の面接」がある。これは下級生を一人づつ面接室に呼び、恐る恐る呼ばれた下級生部員に碁盤の上に正座させる。まるで厭味を言ういじめ大会のようであり我々には大変楽しいものだが、泣きだす女の子もいて壮絶なものであった。

しかしながら、この効果は日頃自分の弱さを分りながら隠そうとし自分の力に閉じこもってしまう、その力を寄ってたかって暴力的にこじ開けて裸にする事で、宇宙観を広げ何事にも動じない強い体質をみかく所に意義があった。

さらに一例を紹介すれば、満点の星空のもと全員が腹の底から大声を上げて自己紹介、PRをするもので、個人単位と言うことでは東京タワー以上にときめくものがあった。

こういった努力が実ったのか、念願

の一部リーグ入りという快挙を果たしたのである。

このことは今でも私の誇りであり、支えである。

私自身は射撃部に何ら手柄の様な足跡は残していないが、非力な私が四年間大学の体育部に所属しただけでも褒めてやりたいと思ってる。

馬鹿とはさみはつかいよう。
可愛い後輩はそだてよう。
後輩諸君よ、ただ撃てばいいと思ふ事なかれ。

自分の人生を考え青春の一頁を飾る時も今なんだ！10点を射ると同時に確かな幸福への手こたえもつかみとてくれ！

最後に朝霞オリンピック射撃場で挫折しかけた私にやさしくさとし、お導きいただいた先輩との話の骨子を紹介して終わりたいと思います。

(O主将) 何か悩んでいる様だが、部活動で気に入らない点でもあるのか
気楽に言ってみろよ？
(私) 封建的かつ暴力的体質です。

(O主将) 俺たちには長い伝統があるし、このやり方でずっとやって来た、間違いは思っていない。
それで、幹部になってもましがいだと思ったら、お前たちで直せばいい。
やりはじめた事を中途半端にしてはダメだぞ、頑張ってみろ。

封建制の中にもこの先輩の温かい言葉に私は、「よしがんばってついてい

こう」と思ったのである。
この時の一言は私にとって、忘れられない心のなかの最高級の名台詞となっている。

目下、射撃をやって基礎体力を備えたお陰で、バイクで転げても大したけがにもならずそこそこの元気に暮らしています。

先輩、同輩、後輩のみなさんといつの日か酒でも酌み交わし語り会える日を楽しみに、うだる様な暑さのなかでワイプロを撃撃っています。

一九九七年八月三十一日
山口にて
中野 康世
押 忍

伝聞録 國領子院院十八留子

体太月浦正△△△△射撃選手卸卸
前号からのつづき

昭和四十四年、本學射撃部は春合宿以来「勝つ」を目標に、各員夫々自分の持場をよく理解し、総員一丸となり涙ながらの努力を惜しむことなく毅然として明日に向かってひた走った。

結果は一点差で一部昇格を逃したが、御家芸伏射の復活を果たしたことは部員一人一人の心に価値ある多くの恵をもたらしたと言えよう。

あくる昭和四十五年、この年はスタートから多難であった。本學射撃部の主力選手であった八名が卒部という事態から始まったのである。

なんとしても「伏射の國學院」という名だけは受け継がなければいけないという思いが全部員の心に重く押し掛

かった。しかし本學は怯まなかった。春合宿(朝霞旅館)に加えて団体選手強化合宿(朝霞旅館)、世田谷区厚生年金スポーツセンター射撃場・朝霞射撃場・富岡射撃場への遠征練習、本營屋上射撃場で裸電球を点灯しての夜練鈴木マネージャー案による関東学院大学および芝浦工業大学との練習試合実施等々をこなしていった。

そして遂に五月三・四日、本學は関東学生ライフル射撃伏射選手権大会に挑んだのである。

結果、AR陣は2876点を重ね上げて団体準優勝を獲得、個人表彰でも団体戦に出場し582点を撃ち上げた吉井宣明選手(三年)が準優勝に輝いた。SB陣は目標としていた団体8位以内入賞は逃したが、前年の同大会の本學獲得点数に近いものを撃ち込み健闘したのであった。

碧空に翻る日章旗・学連旗の下で、表彰式を終えた本學全部員の顔も晴れと澄み渡り雲の欠片もなかった。本大会までの二カ月間精一杯やったという掛け替えのない充足感を心から味わったのであろう。

つづく

創刊号「伝聞録」に引き続き今回も最後に「へつづく」としました。これにつきましてはOBの皆様及び現役諸君が個人個人の「思い出」あるいは「思い」をそのまま「続き」として当てはめていただき、感慨を巡らしていただければ幸いと存じます。

「伝聞録」はひとまずは終わりとし、爾後「友弾によせて」と「内外の動きと日本の世相」に引継ぎたいと思いません。